

障害者スポーツの表現を巡って—adapted sports とは何か—

佐々木 隆

プロローグ

筆者は社会福祉や障害者支援、特別支援教育等の専門家でもなければ研究者でもない。もともとは大学の担当授業科目「国際文化交流」の中で「2020 東京オリンピック・パラリンピック」を取り上げており、特にパラリンピックに注目したことが今回の契機となった。「学生のパラリンピックの理解はどの程度のものなのか」「パラリンピックはどのような変遷を経ているのか」「障害者スポーツはどう捉えられているのか」「障害者あるいは障害者スポーツの表記はどのように変わってきたのか」といった疑問もあり、その経緯をまとめることにした。

1 障害者スポーツとオリンピック

近代オリンピックが始まりを経て第2次世界大戦後になると、負傷した兵士の治療とリハビリテーションのために、もともと体力には自信のある兵士達のための大会が開かれるようになった。それがストックマン・デビル競技会である。

第二次世界大戦（1939～1945年）後、多くの国々で、戦争で障がいを負った軍人たちのリハビリテーションの補助的な方法として、スポーツが徐々に紹介されていった。そして、ヨーロッパ諸国をはじめ、日本、オーストラリア、そして香港などのアジア・太平洋諸国の病院やリハビリテーションセンターにも広がっていった。

この身体障がい者のスポーツの黎明期に大きく貢献したのが、英国のストック・マンデビル病院である。

1944年、イギリスのチャーチル首相らは、ドイツとの戦争激化によ

り負傷し脊髄損傷になる兵士が急増することを見越して、兵士の治療と社会復帰を目的に、ロンドン郊外にあったストーク・マンデビル病院内に脊髄損傷科 (Spinal Unit) を開設した (1960 年に国立脊髄損傷センターと改名)。その初代科長に、1939 年にナチスによるユダヤ人排斥運動によりイギリスに亡命した医師、ルードウィッヒ・グットマン卿 (Sir Ludwing Guttmann) が任命された。グットマン卿は、「手術よりスポーツを」の方針を掲げ、スポーツを治療に取り入れる方法を用いた (1944 年にパンチボール訓練を導入、その翌年からは車いすによるポロやバスケットボール、卓球などを導入)。(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 38)

なお、ストーク・マンデビル病院から始まったスポーツ大会がやがて国際的な大会へと発展し、国際ストーク・マンデビル大会として組織化されるまでになったことについてはすでに筆者も取り上げた経緯があるため、ここでは割愛する。(佐々木 b 1356・1445)

2 障害者の表現と障害者スポーツ

(1) 中村裕

日本の障害者スポーツの先駆者、さらにはパラリンピックを創った医師とは中村裕 (1927-1984) である。中村に障害者スポーツの重要性を鼓舞したのはストーク・マンデビル病院であった。

中村は1958年、31歳の時に国立別府病院に着任し、脊髄損傷による患者の治療やリハビリテーション (リハビリ) の研究にあたった。当時の日本では、「リハビリ」という言葉はまだ一般的ではなく、医学界でも「未知の分野」だった。中村は 1960 年に、リハビリの研究生として欧米に派遣され、前述したイギリスのストーク・マンデビル病

院を訪れることになった。この訪問が後に日本の障がい者スポーツの歴史をつくることになるのは、当時30代の若きドクターは想像さえしなかっただろう。「なんてことだ。これは日本では考えられない」中村はストーク・マンデビル病院で、車いすの障がい者がバスケットボールをしているのを見て衝撃を受けた。当時の日本では、車いすの障がい者は社会生活を行うことさえ難しく、ましてスポーツをすることなど考えられなかった。さらに中村にとって驚きだったのは、ストーク・マンデビル病院では、8割以上の患者が半年以内に社会復帰を遂げていたことだった。日本の社会復帰率は、ほんの2割程度だった。当時の道路はほとんど舗装されてなく、もちろんエレベーターなど普及していない。だから車いすで外出することは難しく、障がい者に対する差別や偏見も強かったので、家族も車いす患者を家から出すことは少なかった。

「障がい者を見世物にするのか」「スポーツは、障がい者の健康維持だけでなく、積極性や社会性をもたせるうえでも優れている」そう考えた中村は留学から帰国後、さっそく車いす患者のリハビリにスポーツを取り入れようとした。しかし当時はまだ障がい者がスポーツをすることに理解がなく、「障がい者を見世物にするのか」と多くの批判を浴びることになった。中村の職場でも、医師たちは「せっかくよくなりかけたものを悪くするようなものです」「だれが責任を取るんだ」と反対した。若きドクターは自分の信念を曲げず、地元大分の行政や政治家、医療関係者らを説得して回り、とうとう1961年に、大分で日本初の障がい者スポーツ大会を実現した。（鈴木）

中村が最終的に目指していたものは、単なるリハビリではなく、スポーツであった。1981年の国際障害者年に合わせて世界初の車いす単独大会を大分で開催したのも中村の尽力によるものである。

(2) 「パラリンピック」の名称は日本が造った言葉

中村裕の努力もあり 1964 年の東京オリンピックに合わせてパラリンピックの開催にこぎつけた。このあたりについては『国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書』(1965) の国際身体障害者スポーツ大会運営委員会会長の葛西嘉資「はじめに」を紹介しておきたい。

パラリンピックは、非常に語呂がよいといわれた。そのせいも、近来、これほど人々にアピールしたことばはあるまい。パラリンピックというのは、下半身マヒのパラプレジアのパラと、オリンピックのリンピックをつなぎ合わせたもので、車イスを使う下半身マヒ者のスポーツ大会という意味になり、今回の、大会の第一部だけにあてはまることばである。しかし、身体障害者はそれだけではない。ほかにも、手足や目や耳の不自由な人々も、たくさんいる。そして、せっかく身障者の国際スポーツ大会を日本でやるのであるから、これらの人たちにも、ぜひ、参加して貰いたいということで、第二部を設け、ひろく全身体障害者の大会にしたわけである。

では、なぜ一部と二部に分けたかという、本来のパラリンピックである車イスを使う身障者の大会は、すでに国際大会 12 回の経験をもち、そのルールややり方もきちんとしているのに、第二部の方は経験も浅く、ルールも区々で、国際ゲームをやれるほど熟していない。やむを得ず、一部と二部に分けて、二部の方を日本人選手だけで競技する国内大会にしたわけである。

そんなわけで、この 2 つをいっしょにした呼名がパラリンピックといわれるようになり、いつの間にか、私自身の肩書も、パラリンピック運営委員会会長になってしまった。

身障者スポーツ大会の意義は、第一には身障者自身が、まず体力をきた

え、その体力や機能に自信をもつようになり、明るい希望と勇気を抱くようにすることで、グットマン博士も「失われたものをかぞえるな、残っているものを最大限に生かせ」といっているように、身障者のコンプレックスを解消させることである。第二には、一般社会に、身障者の可能性をみて貰って、関心と理解を深めることである。このことは、身障者の社会復帰に大きなたすけとなる。第三には、スポーツを通じて、同じからだの不自由になやむ人たちが友誼と親睦を深め、お互いに励まし合って、一人一人の生活を向上させて行くようにすることである。(葛西 2)

この報告書の英語表記は以下の通りであった。

THE TOKYO GAMES FOR THE PHYSICAL HANDICAPPED PARALYMPIC TOKYO 1964

当時は身体障害者を“the physical handicapped”と表現していたことも注目しておきたい。現在では“the disabled”“the challenged”などと表現されている。高等学校の英語の教科書では“the challenged”がすでに使用されている。英語表現では the + 形容詞、the ~ed の形は「～の人々」「～者」となる。

(3) 障害者の表現と日本の障害者スポーツ

「障害者」を表現する英語はどうなっているのか。以前は電車やバスの車内掲示に‘the handicapped person’や‘the handicapped’という表現があったが、最近では‘the disabled person’や‘the disabled’、‘the disability’といった表現が主流だ。インターネット上の“Online Etymology Dictionary”で‘handicap’をリサーチすると次のように出てくる。

handicap(n.)

1650, from *hand in cap*, game whereby two bettors would engage a neutral umpire to determine the odds in an unequal contest. The bettors would put their hands holding

forfeit money into a hat or cap. The umpire would announce the odds and the bettors

would withdraw their hands—hands meaning that they accepted the odds and the bet

was on, hands empty meaning they did not accept the bet and were willing to forfeit the money. If one forfeited, then the money went to the other. If both agreed either on forfeiting or going a head with the wager, then the umpire kept the money as payment. The custom, though not the name, is attested from 14c. (“Piers Plowman”).

Reference to horse racing is 1754 (*Handy-Cap Match*), where the umpire decrees the superior horse should carry extra weight as a “handicap;” this led to sense of “encumbrance, disability” first recorded 1890. The main modern sense, “a mental or physical disability,” is the last to develop, early 20c. (Online Etymology Dictionary)

handicapped (adj.)

“disabled,” 1915, past-participle adjective from handicap (v.). Originally especially of children. Meaning “handicapped persons generally” is attested by 1958. (Online Etymology Dictionary)

ランドルフ・ブルネ (Randolf Bourne, 1886-1918)は『月刊アトランテ

イック』(1911)に「障害者」(The Handicapped)を発表した。その冒頭には「身体障害」(physical disabilities)の表現がある。

...the man whom physical disabilities have made so helpless that he is unable to move around his fellows (Bourne)

身体障害によって人があまりにもどうにもならなくなると、仲間と動き回ることはできない。(瀧 2207)

以降は特に障害者スポーツ史をたどりながら、身体障害者、身体障害スポーツを表現する英語についても注目しておきたい。なお、現在、学習指導要領等では合理的配慮の中で捉えられている。

(4) 障害者及び障害者スポーツの表現の変遷年表

ここでは国連、団体、大会、中村裕、事典及び研究書等や英語表現に係るものを簡単にまとめた。

- 1871年 グラスゴーろうあサッカークラブ (イギリス)
※世界初の障害者スポーツクラブと言われている
- 1888年 聴覚障害者スポーツクラブ (ドイツ・ベルリン)
- 1910年 ドイツ聴覚障害者スポーツ協会発足
- 1918年 日本聾啞協会東京部会の東京野球大会
- 1922年 身体障害者自動車クラブ発足
- 1922年 片上肢ゴルフ協会発足
- 1924年 国際ろう者スポーツ委員会 (International Committee of Sports for the Deaf, ICSD) (International Committee of Silent Sports, CISS)が発足。第1回デフリンピックとなる。ただし、当時はまだデフリンピックの名称はなく、

International Silent Games と呼ばれていた。

- 1926年 第1回ろうあ者体育競技大会開催（日本）
- 1928年 視覚障害者スポーツ団体発足（ドイツ）
- 1938年 全国ろうあ者陸上競技大会を開催（京都）
- 1940年 官立東京聾啞学校で野球大会（大会名不詳）
- 1947年 全日本ろうあ連盟発足
- 1948年 ストーク・マンデビル競技会（Stoke Mandeville Games, SMG）パラリンピックの先駆）グットマンはロンドンオリンピックの開会式当日に車いす選手のための競技会をストーク・マンデビルで開催した。「ストーク・マンデビル大会」で表現されることもある。
- 1948年 学校教育法の施行により盲学校・聾学校の都道府県による設置の義務化
※文部省「盲学校・聾学校教育の義務化」
- 1950年 身体障害者の社会リハビリテーション決議（国連経済社会理事会）（Social Rehabilitation Resolution for Physically Handicapped）
- 1952年 ストーク・マンデビル競技会にオランダも参加するように国際的な大会となった。
- 1959年 中村裕が国立別府病院に着任。脊髄損傷による患者のリハビリテーションの研究にあたる。
- 1960年 第9回ストーク・マンデビル競技会がローマオリンピックの際に行われたことから、これがのちに第1回パラリンピックと呼ばれるようになった。
- 1960年 中村裕がリハビリの研究生としてストーク・マンデビル病院を訪問。
- 1961年 中村裕が大分で日本初の障害者スポーツ大会、「第1回大分県身体障害者体育大会」を開催。

1962年 中村裕、第11回国際ストック・マンデビル競技会に2名の日本人を派遣。アジアからの初めての参加。

1962年 ジョン・F・ケネディの妹、ユーン・ケネディ・シュライバーが自宅の庭を開放して35人の知的発達障害者を招いてディキャンプを行ったことが、知的障害者のスポーツ大会、スペシャルオリンピックスの先駆を言われている。

アスリート宣誓の精神：Let me win. But if I cannot win, let me be brave in the attempt. 1968年にアメリカで第1回の国際大会が行われた際に、創設者のユーンが、古代ローマで剣闘士が闘技場に入る時に口にしていたという Let me win. But if I cannot win, let me be brave in the attempt. (私たちは精一杯力をだして勝利を目指します。たとえ勝てなくとも、頑張る勇気を与えて下さい。) という言葉を用いたのが始まり。(スペシャルオリンピックスアスリート宣誓)

1965年 『国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会報告書』

※英語タイトル The Tokyo Games for the Physically Handicapped Paralympic Tokyo 1964

※パラリンピックの名称

「パラリンピック (PARALYMPIC) は通称「身障者五輪」などといわれているが、これは、パラプレジア (PARAPLEGIA) のパラと、オリンピック (OLYMPIC) のリンピックを組合わせて、パラリンピックと綴ったものである。このパラリンピックということばは、日本ではじめてうち出された愛称で、下半身マヒばかりでなく身障者全体の国際的スポーツ競技会を、多くの人々に認識させる適切な表現である。

パラリンピック大会とオリンピック大会との間には、直接的な関係はないが、1956年、オリンピック運動について功績があった場合に贈られるファーンリーカップが、国際オリンピック委員会からこの運動に与えられた。この意義は、国際オリンピック委員会がこの団体を、同じ道を進む団体として認めたことである。オリンピックが開かれる年には、同じ場所で、同じ施設を使って行なわれるようになったことも、両者の関係を深めている。）

- 1968年 スペシャルオリムピックス (Special Olympics, SO)
- 1970年 日本車椅子バスケットボール選手権大会開始
- 1972年 全国身体障害者スキー大会開始
- 1973年 全国身体障害者アーチェリー選手権大会開始
- 1973年 障害者ヘルスフィットネス国際連盟 (International Federation of Adapted Physical Activity, IFAPA)が発足
- 1974年 大阪市身体障害者スポーツセンター開設
※全国初の在宅の障害者を対象したスポーツセンター
- 1975年 障害者の権利宣言 (国連) (Declaration on the Rights of Disabled Persons)
- 1975年 中村裕の提案によりスポーツを通じたアジアや南太平洋の障害者福祉の向上を目指したフェスピック大会 (極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会 Far East and South Pacific Sports Games for the Disabled) 開催。
※ストーク・マンデビル競技会のような脊髄損傷者だけの大会ではなく、あらゆる身体障害者 (視覚・脊髄損傷・頸髄損傷・切断・脳性まひなど) を対象。
- 1977年 日本障害者体育・スポーツ研究会(The Japanese society for the handicapped people physical education/sports)発

足

- 1977年 第5回別府ロードレースに車いすアスリート9人が2.7キロコースに出場。
※中村裕の後押しで実現
- 1977年 八代英太（前島英三郎）、第11回参議院選挙全国区に無所属で出馬し初当選。
※車椅子の国会議員としてその後活躍。1999年に郵政大臣就任。
- 1977年 障害者ヘルスフィットネス国際会議（International Symposium on Adapted Physical Activity, ISAPA）発足。
- 1978年 国際脳性麻痺者スポーツ・リクレーション協会（Cerebral Palsy International Sports and Recreation Association, CPISRA）発足。
- 1979年 養護学校への就学義務と設置義務化（知的障害・肢体不自由を含む）
※日本ではようやくこの段階で障害児体育（adapted physical education）が義務教育された。
- 1980年 国際障害分類（WHO）（International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps, ICIDA）
- 1981年 国際障害者年（International Disabled People's Year）（国連）
※テーマは「完全参加と平等」
- 1981年 大分国際車いすマラソン（Oita International Wheelchair Marathon）
※中村裕の努力により世界で初めての「車いすだけのマラソンの国際大会」としてスタート。ハーフコース（21.0975 km）
- 1981年 国際視覚障害者スポーツ連盟（International Blind Sports Federation, IBSF）が発足。

- 1981年 沖縄県立北城ろう学校が「ろう学校であること」を理由に日本
高校野球連盟への加盟を拒否される。
- 1982年 日本高校野球連盟、沖縄県立北城ろう学校の加盟を正式決定。
- 1982年 国際障害者スポーツ調整委員会 (International Coordinating
Committee of
Sports for the Disabled, ICC) が発足。
※車椅子使用者、切断・機能障害者、脳性まひ者と視覚障害
者の4つの障害別スポーツ組織の代表者の構成
- 1982年 Ronald, C. Adams, et al., editors. *Games, Sports and
Exercises for the Physically Handicapped*. Lea &
Febiger.
※ “Chapter VIII Adapted Sports, Games, and Activities”
(pp.204-338)
- 1983年 第3回大分国際車いすマラソン大会からフルマラソンとなり、
国際ストーク・マンデビル競技連盟の公認レースと認定。
- 1985年 (財)日本身体障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導者
制度創設
- 1986年 国際知的障害者スポーツ連盟 (International Sports
Federation for Persons with Intellectual Disability (INAS,
INAS-FID) が発足。
- 1986年 アジア障害者体育・スポーツ学会 (Asian Society for Adapted
Physical Education and Exercise, ASAPE) が発足。
- 1988年 Claudine Sherrill. *Leadership Training in Adapted
Physical Education*. Human Kinetics Books.
- 1988年 乙武洋匡『五体不満足』 (講談社)
- 1989年 国際パラリンピック委員会 (International Paralympic
Committee, IPC) が発足。

※パラリンピックに参加する各種国際障害者スポーツ統括団体を統括。

1990年 Joseph P. Winnick, editor. *Adapted Physical Education and Sport*. Human Kinetics Books.

※Adapted sport consists of sport experiences modified or specially designed to meet the unique needs of individuals. The settings for adapted sport may range from integrated settings, where individuals with handicapping conditions or disabilities interact with able-bodied participants, to segregated environments in which play includes only people with handicapping conditions. (Winnick a 5)

1992年 第1回全国精神薄弱者スポーツ大会

1993年 エリッヒ・バイヤー編／朝岡正雄監訳『日独英仏対照スポーツ科学辞典』（タイ週刊書店、1993年4月）

※Erich Beyer, editor. *Dictionary of Sport Science: German, English, French*. 原本は *Wörterbuch der Sportwissenschaft: dt., engl., franz.* Redaktion Erich Beyer. 1987 by Verlag Karl Hofmann.

※障害者スポーツ

Behindertensport 独

Sport for the Disabled 英

Sport pour handicapés 仏

障害者スポーツには、特別なスポーツ教育上の指導や医学的配慮を要する障害者スポーツ活動のすべてが含まれる。

障害者スポーツは、今日では、目標設定や課題の異なる、以下の3つのレベルで行われている。まず第一に、

それは治療の手段として実施され、法律で認められた治療法として確立されている。第二には、多くの障害者に⇒一般スポーツや⇒余暇スポーツとして提供されている。第三に、達成志向の強い強い障害者たちによって、記録をめざすスポーツや競技スポーツとして行われている。

(バイヤー／朝岡 253)

※adapted sport, adaptive sport への言及はない。

1994年 Kyonosuke Yabe, Katsuhiko Kusano, Hideo Nakata, editors.
Adapted Physical Activity: Health and Fitness.
Springer-Verlag.

※Claudine Sherill “Adapted Physical Activity Pedagogy: Principles, Practices, and Creativity” には
“Contemporary Definition of Adapted Physical Activity” の項目がある。

“Adapted physical activity, as a profession and scholarly discipline, requires a broad definition to guide university study and research as well as service delivery. In this definition, we need to consider (a) attitudes and beliefs, (b) the knowledge base, and (c) service delivery. Because definitions are linked with theories, scholars need to synthesize facts in each of these areas into theories to systematize a knowledge base for adapted physical activity.” (Yabe, Kusano, Nakata 17)

※ “adapted sports” の表現はない。

1994年 矢部京之助・斎藤典子「アダプテッド・スポーツ（障害者スポーツ学）の提言—水とリズムのアクアミックスの紹介—」（『女子体育』第36巻、日本女子体育連盟、1994年11月）

※日本の「アダプテッド・スポーツ」研究の先駆と言われている。

「機能障害は生物学的レベル、能力低下個体レベル、社会的不利は社会的レベルとみることができます。このような概念を背景にした中で、体育、スポーツ活動は、低下した日常生活能力や職業能力をいかに環境に適応させるか、いわば人間個体の適応性 (adaptation) を高めることに関わっています。具体的には、運動の種類や方法を障害の種類や程度、あるいは本人の能力や好みにアダプト (adapt:適応、適合、合わせる) させることです。したがって、障害をもつ人 (低高齢者を含む) を対象にした体育・スポーツをアダプテッド・スポーツ (Adapted Sports)、または、障害者スポーツ学と命名することとしたい。」 (矢部・斎藤 20)

1995 年 国際ろう者スポーツ委員会がパラリンピック国際委員会を脱退。

※これによりパラリンピックに参加できなくなった。

1995 年 Karen, P. DePauw & Susan, J. Gavron. *Disability and Sport. Human Kinetics.*

※ “Disability Sport” の項目内に “handicapped sports, sport for the disabled, adapted sport, disabled sport, wheelchair sport” (Karen & Gavron 6) とある。

1995 年 A.E. Dell Orto and R.P. Marinelli, editors. *Encyclopedia of Disability and Rehabilitation. Macmillan*

1995 年 ★TV ドラマ『星の金貨』 (4月～7月)

※耳と口が不自由な捨て子の倉本綾 (主演: 酒井法子) の成長ドラマ。

1996 年 精神に障害を持つバルネラブルな人の法律 (カナダ) (The

Vulnerable Persons Living with Mental Disability Act)

1996年 日本リハビリテーション医学会スポーツ委員会編『障害者スポーツ』（医学書院、1996年8月）

※「アダプテッドスポーツ」の表現は使用されていない。

1998年 第2種社会福祉法人プロップ・ステーション

※竹中ナミ「チャレンジドや高齢者が、元気と誇りを持って働ける国に」

プロップ・ステーション（略称プロップ）は、ICT（情報コミュニケーション技術）を活用してチャレンジド（challenged）の自立と社会参画、とくに就労の促進を目標に活動しています。

「チャレンジド」というのは最近の米語で、「神から挑戦という課題、あるいはチャンスを与えられた人」を意味し、障がいマイナスのみ捉えるのではなく、障がいを持つゆえに体験する様々な事象を自分自身のため、あるいは社会のためポジティブに生かして行こう、という想いを込めた呼称です。（竹中 a）

※竹中ナミ『「チャレンジド」という言葉について〜プロップ・ステーションからの提案』

Challenged（チャレンジド）というのは「障がいを持つ人」を表す新しい米語「the challenged（挑戦という使命や課題、挑戦するチャンスや資格を与えられた人）」を語源とし、障がいマイナスのみ捉えるのではなく、障がいを持つゆえに体験する様々な事象を自分自身のため、あるいは社会のためポジティブに生かして行こう、という想いを込め、プロップが1995年から提唱している呼称です。

私たちが「チャレンジド」という呼称を提唱するのは、いわゆる「障がい者」が、その文言が表すようなネガティブ

な存在から脱却できる社会の創造をめざしているからです。そもそも米国でこの言葉が生まれ、世界的に広まったのは「人権の国アメリカと言いながら、自分たちが、“Handicapped” や “Disabled person” というネガティブな呼び方をするのは、おかしいのではないか？」という声が約 20 年前に市民からあがり、様々な呼称が提唱されるという経緯を経て、“the Challenged” が使用されるようになったのだ、と聞きました。今ではスウェーデンなどでも使われています。(竹中 b)

1999 年 第 1 回世界車いす競技大会がニュージーランドで開催。

1999 年 Colin Barnes, Geof Mercer, and Tom Shakespeare.

Exploring Disability : A Sociological Introduction. Plity Press.

1999 年 石川准・長瀬修編『障害学への招待——社会、文化、ディスアビリティ』(明石書店、1999 年 3 月)

※日本で最初の本格的な障害学の研究書。

2000 年 ★TV ドラマ『Beautiful Life～ふたりでいた日々～』(1 月～3 月)

※難病で車いす生活をしながら図書館司書として働く町田杏子(常盤貴子)と美容師の沖島終二(木村拓哉)の悲しいラブストーリー。

2000 年 デル・オルト、R.P.マリネリ編／中野善達監訳『障害とリハビリテーション大事典』(湖南出版社、2000 年 10 月)

2000 年 シドニーオリンピック時に IOC と IPC との間で正式に協定が結ばれた。

※バスケットボールの試合で健常者を紛れこませて金メダルを攫う不正行為が発覚し、それ以降の全ての大会・参加種目において、知的障害者が一時参加出来なくなった。

2014年以降、知的障害者の出場はない。

2000年 『週刊ポスト』（2000年10月20日号、小学館）

※「【世界の読み方 竹村健一】（第925回）IT時代に障害者の在宅勤務と納税を可能にするバリアフリーのための『チャレンジド革命』＜社会福祉法人『プロップ・ステーション』竹中ナミ理事長に聞く＞」

「神様から挑戦される人々」

竹村 プロップ・ステーションのキャッチフレーズは「チャレンジドを納税者にできる日本」だそうですね。このチャレンジド（challenged）って、どういう意味ですか？

竹中 近年、アメリカで用いられるようになった障害者を指す造語です。「神様に挑戦するという運命を与えられた人たち」というポジティブな意味を込め、こう呼んでいます。ちなみに障害者を納税者にするというのは、ケネディ大統領の選挙公約だったんです。（竹村・竹中）

2001年 国際生活機能分類（WHO）（International Classification of Functioning, Disability and Health, ICF）

2001年 第1回全国障害者スポーツ大会

2002年 アジア障害社会学会（The Asian Society of Disable Sociology）が発足

2003年 NPO法人チャレンジド設立

※「チャレンジドは、『障碍当事者と共に学び、共に生きる』をモットーに、障碍のある方へのヘルパー派遣・障碍のある子どもの日中一時支援・相談・情報提供・障碍者講師派遣・支援者の育成・学習会・交流・イベントなどを行っています。」（NPO法人チャレンジド）

2004年 国際車いす・切断者競技連盟（International Wheelchair &

Amputee Sports Federation, IWAS) が発足

※ 国際ストーク・マンデビル車椅子競技連盟
(International Stoke Mandeville

Wheelchair Sports Federation, ISMWSF) と国際身体障
害者スポーツ機構 (International Sports Organization for
the Disabled, ISOD) が合併

2004年 コリン・バーンズ他/杉野昭博訳『ディスアビリティ・スタデ
ィーズーイギリス障害学概論』(明石書店、2004年3月)

2004年 矢部京之助他編『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高
齢者のスポーツ実践のための理論～』(市村出版、2004年
10月)

矢部京之助「序章 アダプテッド・スポーツとは何か」

「…スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合
(adapt) させることによって、障害のある人は勿論のこと、
幼児から高齢者、体力の低い人であっても誰でもスポ
ーツに参加で

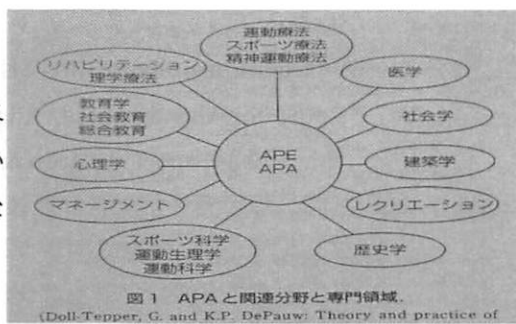
きるのである。
今日では、世界的に障害者とい
う言葉を用いない傾向にある。

英語圏では、

1970年代から障害者の体育、スポーツを adapted physical
activity, APA と呼んでいる。その概念は adapted physical
education (障害者体育、APE) の発展 (図1 p.5)

型である。APE・APA に関する分野と専門領域を図1に示
した。

ところで、APA に馴染む訳語が見あたらないので、意識



を試みた。Adapted はリハビリテーションやレクリエーションなどと同様に発音式仮名遣いとする。physical activity は直訳の身体活動にしても学術用語風の堅いイメージが付きまとう。体育に意識すると、実践者の受動的な姿勢がイメージされる。したがって、実践者が主体的に取り組む身体活動として、スポーツという言葉当てはめることにした。APA の意識は「その人に合ったスポーツ」になる。そこで「アダプテッド・スポーツ、adapted sport, AdS」という既成の概念にとらわれない造語を提唱する次第である。(矢部 a 3 - 4)

2004 年 日本のプロ野球ドラフト会議で、聴覚障害者が史上初めて指名。翌 2005 年、プロ 1 軍デビュー。

2005 年 P.DePauw Karen & J.Gavron Susan. *Disability Sport*. Human Kinetics. Second edition.

※初版は 1995 年で *Disability and Sport*。第 2 版で and がなくなっている。

※“Disability Sport” の項目内に “handicapped sports, sport for the disabled, adapted sport, disabled sport, wheelchair sport” (Karen & Susan 2nd 7) とある。

2005 年 桜井伸二「障害者スポーツの競技力向上とアダプテッドスポーツ」(『ストレングス&コンディショニング』第 12 巻第 1 号、日本ストレングス&コンディショニング協会、2005 年 1 月)

「英語で『障害者』にあたる言葉として古くは『handicapped』が一般的であった。その後『impaired』や『disabled』が用いられるようになったが、最近では国際的にはそうした言葉自体を使わなくなる傾向になる。近年では『障害者スポーツ』『障害者体育』に代わる言葉として『アダプテッ

ドスポーツ』や『Adapted Physical Activity』が提唱されているのである。」（桜井 45）

2006年 障害者の権利に関する条約（国連）（Convention on the Rights of Persons with Disabilities）

2006年 山崎昌廣代表『学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究』（～2008年度 科学研究費助成事業）

2006年 Gary L. Albrecht, general editor. *Encyclopedia of Disability*. SAGE Publications.

※the challenged の表現はない。

2006年 『保健の科学』（特集：アダプテッド・スポーツ—その人に合ったスポーツ）（第48巻第8号）（杏林書院、2006年8月）

※臼井永男「アダプテッド・スポーツの概念」

障害者を特別視することなく、各々の特性に応じた対応が重要となる。スポーツのルールや用具を工夫し、障害の種類や程度に合わせる（adapt）ことによって、障害の有無、年齢や性の違い、体力の違いがあってもスポーツに参加することが可能となる。このような、障害のある人や高齢者のスポーツを総称してアダプテッド・スポーツ（adapted sport）という用語が矢部によって提唱された。（臼井 556）

2006年 日本体育学会編『最新スポーツ科学事典』（平凡社、2006年9月）

※中澤公孝「アダプテッド・スポーツ」

「Adapted sports の邦訳。身体に障害がある人などの特徴にあわせてルールや用具を改変、あるいは新たに久安して行うスポーツ活動を指す。身体に障害のある人だけではなく、高齢者や妊婦等、健常者と同じルールや用具の下にス

スポーツを行うことが困難な人々がその対象となる。Adapted physical activity (APA) はその上位概念であり、スポーツに限らず、リハビリテーションや治療目的の運動なども含め種種の目的で行われる身体活動全般を意味する。アダプテッド・スポーツと類似の概念に adapted physical education (障害者体育、APE) がある。これも、APA に含まれる概念といえる。」(中澤 17)

※藤田紀昭「アダプテッド・スポーツ」

「障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す。青年期の男性を中心に開発継承されてきた近代スポーツに対するオルターナティブでもある。類義語にアダプテッド・フィジカル・アクティビティがある。1950年代初期のアメリカで、適応体育(adapted physical education)が、障害のある子どもたちのための学校体育を指す言葉として使われ始めた。1970年代には学校教育、体育プログラムという概念を超えて使われる言葉として、アダプテッド・フィジカル・アクティビティが紹介され、1980年代後半、障害者や高齢者の体育、スポーツ、身体活動全般を指す言葉として専門家の間で定着した。しかし、字数が多く、日本語に訳しにくい上に、意味もわかりないことから、2003年頃からわが国ではアダプテッド・スポーツという言葉が使われるようになった。」(藤田 a 385)

2007年 田口貞善編『スポーツの百科事典』(丸善、2007年1月)

アダプテッド・スポーツとは

「障害者スポーツは、障害のある人のために新たに考案されたスポーツをさすのではない。健常者がおこなっているス

ポーツを、ルールや用語を障害の種類や程度に応じて一部変更しておこなうスポーツのことである。たとえば、ワン・バウンドだけではなくツー・バウンド後の返球が認められている車いすテニス、立つことが困難な人のためのシッティングバレーボール、健常者が伴奏者（ガイドランナー）となる視覚障害者（people with visual impairment）の走競技などである。このように障害者スポーツとは、各人の障害に適応（adapt）させることによっておこなわれるスポーツなのである。このような意味から、さらには障害者という言葉が世界的に使われなくなったことから、現在では障害者スポーツはアダプテッド・スポーツ（adapted sport）とよばれるようになったてきた。

アダプテッド・スポーツは“その人に適応したスポーツ”
“実践する人に合わせたスポーツ”という意味であるから、
障害のある人に限らず、病弱者(valetudinarian)、高齢者、
妊婦、幼児など、だれにでも参加できるスポーツということになる。」（田口 248）

2008年 株式会社 KDDI チャレンジド設立

※KDDI チャレンジドは、KDDI におけるダイバーシティ施策の一環として、障がいのある方の雇用を促進するために設立されました。障がいのある方各々の状況に配慮した安定的な労働環境を提供し、生きがいと働きがいのある職業生活の場を創出、雇用機会の拡大を図ります。（株式会社 KDDI チャレンジド）

2008年 藤田紀昭『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』（角川学芸出版、2008年4月）

※藤田は「障害者」に「アダプテッド」というルビをふっている。

「障害者のある人のスポーツを表現する言葉の一つにアダプテッド・フィジカル・アクティビティ (adapted physical activity) があります。このほかにも disabled sports, sports for people with disability, disability sports, adaptive sports など、障害者スポーツを表す言葉はいくつかあります。これらの中で、障害のある人のスポーツに関して最も包括的な概念を持つのがアダプテッド・フィジカル・アクティビティです。

この言葉はを文字どおりに解釈すれば、〈適応させられた身体活動〉となり、スポーツを行う各個人に合わせて創られた身体活動という意味になります。スポーツのルールや身体活動の方法を個人の身体的状況、あるいは知的な発達状況に応じて作り変えるということです。下半身にある障害は、車いすや義足といった用具の使用、それに見合った運動の技術、そして、それに合わせたルールの修正によって運動やスポーツに参加できるものです。」(藤田 c 14)

2008年 安井友康「アダプテッド・スポーツの心理—社会的効果」(『作業療法ジャーナル』第42巻第9号、三輪書店)

2009年 辻井伸行、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝。日本人初。(6月7日)

2009年 NHK制作『チャレンジド』(NHK10月10日～11月7日まで全5回：21:00～21:53)

※土曜ドラマ。全盲の中学教師・埴啓一郎(佐々木蔵之介主演)

※「ストーリー」

全盲となった教師が復職への困難を乗り越え、生徒たちや同僚の教師たちとのふれあいの中で成長していく、愛と

感動のヒューマンドラマ。

「チャレンジド(challenged)」は英語で障害者をさす。神からチャレンジという使命を与えられた人の意。教職への夢をあきらめず、苦難を乗り越えて教壇に復帰し、持ち前のひたむきな姿勢とたゆみない努力で、生徒達に人を愛することの大切さを教えていく主人公と、生徒たちとの心の交流を通して現代の教育のあり方や意義を問いかけるドラマ。」(NHK制作)

2009 年 Ejgil Jespersen and Mike McNamee, editors. *ethics, dis/ability and sports*. Routledge.

“Adapted Physical Activity”

The international body that deals with sports, physical education and movement activities for persons with disabilities, the International Federation of Adapted Physical Activity (IFAPA), characterizes its focus today as ‘individual differences in physical activity that require special attention’. (p.3)

Until 1920s: Swedish, medical, curative or corrective gymnastics;

1920s-1950s: Corrective or individualised physical education;

1950s: Struggle between therapeutic (rehabilitative) and educational (sport) orientations for dominance (“adapted physical education’ became an official AAHPER term in 1952);

1960s, 1970s: ‘Adapted physical education’ challenged as term of choice by strong advocacy for ‘developmental physical education’ and for ‘special

physical education'. Also terms from legislation such as 'physical education for the handicapped' further complicated the terminology issue;

1980s: 'Adapted physical activity' became umbrella term of choice with 1985 merger of Therapeutics Council and Adapted Physical Education Academy into the Adapted Physical Quarterly from 1984 onwards, and the growth of the international Federation of Adapted Physical Activity (IFAPA), founded in 1973 (Sherill and Depauw 1997). (Jespersen and McNamee 3-4)

2009 年 “Sport and Disability thematic profile (print version)”
(International Platform on Sport & Development)
(www.sportanddev.org)(Last updated: June 2009)

Definitions and Terminology

The language of disability sport differs in some parts of the world and an overview of the latest definitions and terminology is provided.

Disability Anyone in the community may experience disability at some point in their lifetime. Disability is a normal part of the human experience, and people with disabilities are part of all sectors of the community: men, women, and children; indigenous and nonindigenous; employers and employees; students and teachers; consumers and citizens.

There are numerous definitions of disability and the debate surrounding appropriate definitions of disability have evolved over time. The World Health

Organisation states that “disability (resulting from an impairment) is a restriction or lack of ability to perform an activity in the manner or within the range considered normal for a human being.”

The United Nations defines persons with disabilities (PWD) as persons who have longterm physical, mental, intellectual or sensory impairments, which, in interaction with various barriers may hinder their full and effective participation in society on an equal basis with others.

Statistics on disability are difficult to compare internationally and also disability statistics do not always include the same definitions, types or categories of disability. The length of time a person is deemed ‘disabled’ affects the way the statistical data is measured and interpreted.

Disability Sport Disability sport is a term that refers to sport designed for, or specifically practiced, by people with disabilities. People with disabilities are also referred to as athletes with disabilities. Deaf sport is distinguished from other groups of people with disabilities and in some countries deaf people prefer not to label deafness as a disability. The rules of deaf sport are not altered, only instead of whistles and start guns, athletes and officials communicate through signs, flags and lights. In many developing countries deafness is still considered a disability.

Adapted Physical Activity (APA) Adapted physical

activity is the profession, the scholarly discipline or field of knowledge, and the service delivery, advocacy and empowerment systems that have been created specifically to make healthy, enjoyable physical activity accessible to all and to assure equal rights to sport instruction, coaching, medicine, recreation, competition and performance of persons with disabilities. According to the International Federation of Adapted Physical Activity (IFAPA), Adapted Physical Activity (APA) means:

- A service-oriented profession
- An academic specialisation or field of study
- A cross disciplinary body of knowledge
- An emerging discipline or subdiscipline
- A philosophy or set of beliefs that guides practices
- An attitude of acceptance that predisposes behaviours
- A dynamic system of interwoven theories and practices
- A process and a product (i.e. programmes in which apatation occurs)
- An advocacy network for disability rights to physical activity of participants with disability
(Sport and Disability thematic profile 8)

2009年 金山千広・山崎昌廣「特別支援教育を踏まえた体育授業と教員養成—小・中学校教員養成コースにおけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況—」(『聖和論集』第38号)

2010年 Jonna Turnbull, managing editor. *Oxford Advanced*

Learner's Dictionary of Current English (Oxford University Press, eighth edition)

- ※ “adapted” の見出し語なし。“adaptive” に「障害」関係の意味の定義なし。(Turnbull 15)
- ※ “challenged” “used with an adverb) a polite way of referring to sb who has a DISABILITY of some sort” (Turnbull 239)
- ※ “disable” “unable to use a part of your body completely or easily because of a physical condition, illness, injury, etc; unable to learn easily: *physically/mentally disabled*” “the disabled people who are disabled” (Turnbull 428)
- ※ “handicap” “(becoming old-fashioned, sometimes offensive) a permanent physical or mental to use a particular part of your body or mind SYN disability” (Turnbull 702)
- ※ “handicapped” “(becoming old-fashioned, sometimes offensive) suffering from a mental or physical handicap SYN disability ” “ the handicapped noun[pl.] people who are hadnicaped”(Turnbull 702)

2010 年 田口貞善他編『スポーツサイエンス入門』(丸善出版、2010年1月)

※矢部京之助「第17章 アダプテッド・スポーツ—障害者の体育・スポーツ」

2010 年 三浦敏弘・小田慶喜「障害者スポーツ支援研究 障害者スポーツ研究からアダプテッドスポーツへの展開—学生に提供する資料を考える—」(『人間健康学研究』第1・2号、関西大学人間健康学部)

2011年 『朝日新聞』(8月26日朝刊)

「チャレンジド! **1** 同じ仕事 障害者も一緒に」

※英語で障害者のことを、試練に挑戦する人という意味を込めて、「チャレンジド」と呼ぶ。

2011年 Joseph P. Winnick, editor. *Adapted Physical Education and Sport* (Human Kinetics Books, Fifth Edition)

“Adapted sport refers to sport modified or created to meet the needs of individuals with disabilities. Based on this definition, for example, basketball is a regular sport and wheelchair basketball is an adapted sport.

Goalball (a game created for people with visual impairments in which players attempt to roll a ball that emits a sound across their opponents' goal) is an adapted sport because it was created to meet unique needs of participants with disabilities. Individuals with disabilities may participate in regular sport or adapted sport conducted in unified, segregated, individualized, and parallel settings.” (Winnick b 6)

2012年 一般社団法人ザ・チャレンジド

※ノーマライゼーションの父と言われているデンマークのバンク・ミケル センは『ノーマライゼーションとは障がいを抱える人の生活条件を可能な限り障がいを持たない人の生活条件に近づけることである』と定義づけています。また、ノーマライゼーションについての表現の一つに『Be challenged by god : 神から挑戦する事を与えられた人』という言葉があります。

チャレンジドとは障がいがあることを前向きに捉えた言葉です。私共 ザ・チャレンジドは、このノーマラ

イズイノベーションを実現する事が、 ミッションであると掲げ、社名と致しました。(一般社団法人ザ・チャレンジド)

2012年 竹林滋編集代表『研究社新英和大辞典』(研究社、2012年2月、第6版)

※ “adapted” “adaptive” に「障害」関係の意味の定義なし

※ “challenged” 「(婉曲) 障害をもった、ハンディのある [を背負った] (handicapped) (竹林 417)

※ “disable” 「(the～：集合的) 身体障害者、身障者」(竹林 693)

※ “handicap” 「心身障害」(竹林 1111)

※ “handicapped” 「身体 [精神] 障害のある、[the～：名詞的に] 身体 (精神) 障害者たち、心身障害者 [身障者] たち」(竹林 1111)

2012年 渡正『障害者スポーツの臨界点—車椅子バスケットボールの日常実践から—』(新評論、2012年7月)

※ 「医学モデルが如実に表れているものとして、WHO が1980年に策定した国際障害分類 ICIDH(International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps)がある。ここで、「Impairment」は機能障害であり、心理的・生理的・解剖的構造あるいは機能の欠損または異常を指している。「Disability」は能力障害(低下)であり、「Impairment」によってもたらされた人間として正常と考えられるか活動を遂行する能力の制限あるいは欠如を指す。そして「Handicap」は、「Impairment」と「Disability」によってもたらされた年齢・性・社会的文化的条件相応の正常な達成を制限し、阻害する社会的な

不利を指している。」(渡正 21)

2013年 金山千広『日本におけるアダプテッド・スポーツの現状と課題
—インクルージョンの普及に伴う学校体育と地域スポーツ』
(博士論文) 博士(学術) 広島大学

2013年 障害者総合支援法(Comprehensive Support for Persons with
Disabilities Act)

※厚生労働省 HP では障害者の英語表記は“disabilities”
となっており、1949年に施行された身体障害者福祉法
(Act on Welfare of Physically Disabled Persons)につい
て、条文等は公式には英訳されていない。後年に制定され
た法令の条文に登場するため、法令名だけが公式に英訳さ
れている。

2013年 障害者総合支援法による就労移行支援事業所チャレンジド・ア
ソウ設立

※チャレンジド・アソウを利用される方の特徴

チャレンジド・アソウの就労移行支援は、全体の利用者数
のうち、精神障害の手帳を持つ方が約70%と大きな割合
を占めているのが特徴です(アスペルガー症候群や
ADHDなど発達障害の方も含む)。それぞれが抱えている
個別の悩みや不安を、企業人スキルトレーニングによっ
て自信に変え、模擬就労を通じてあなたの適正にあった職
業を見つけます。チャレンジド・アソウのトレーニング
を利用された方は、事務系・作業系を問わず自分のやり
たい仕事、自分ができる仕事を見つけられています。

(<https://challenged.ahc-net.co.jp/guide/feature/>) (2020
年3月20日アクセス)

2013年 日本特殊教育学会編『障害百科事典』(丸善出版、2013年1
月)

※Gary L. Albrecht, general editor. *Encyclopedia of Disability* (SAGE Publications, 2006)が原本。

2013年 永浜明子『『アダプテッド・スポーツ』『障がい者スポーツ』に対する大学生の認定度および意識レベル—アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から（第Ⅲ報）—』(『大阪教育大学紀要』第61巻第2号)

2014年 『体育の科学』（特集：障害者とスポーツ）（第64巻第6号、杏林書院、2014年6月）

中澤公孝「Adapted physical activityの可能性と課題」

近藤照彦「アダプテッド・スポーツの射程」

「日本におけるアダプテッドスポーツ（安井、2007）は、1997年日本アダプテッド体育・スポーツ学会(JASAPE)が中心なり、障害や加齢に伴う心身の状態に合わせて、身体の活動や体育スポーツを工夫し、誰もが参加して楽しむことができるとともに、その心身の適合を図るための実践や研究を行う学術団体がある。」(近藤 390)

2015年 中村敏雄他編『21世紀スポーツ大事典』（大修館書店、2015年1月）

矢部京之助「アダプテッド・スポーツ医科学の応用」の一部

「このようなスポーツは、障がいのある人が主役であっても、『必ずしも障がい者に限定したスポーツではないこと』『国際的に障がい者といった包括的な表現をも用いない傾向にあること』などから、アダプテッド・スポーツ(adapted sports)と呼ばれている。具体的には、スポーツのルールや用具を実践者の『障がいの種類や程度に合わせたスポーツ』、あるいは「その人に合ったスポーツ」という意味である。このような手だてによって、障がい者はもちろんこと、高齢者やリハビリテーション過程の低体力

者であってもスポーツを楽しむことが可能になる。したがって、アダプテッド・スポーツとは、障がい者（部分的な機能低下）や高齢者（全体的な機能低下）などの身体能力の低い、人を対象としたスポーツ（主体的な身体活動）である。」（矢部 b 338）

高橋まゆみ「ノーマライゼーション思想と障がいのある人のスポーツ」の一部

「これまで、障がいのある人のスポーツを表現する言葉は、『ハンディキャップ・スポーツ』や『ディサビリティ・スポーツ』から『チャレンジド・スポーツ』や『アダプテッド・スポーツ』と肯定的表現へと変化してきている。このような表記法上の変遷は、障がいを「～できない」というマイナスイメージで固定的に捉えるのではなく、障がいを個性として捉え、中立的またはプラスイメージへとパラダイムシフトを行おうとする努力が正解各地でなされてきた結果の1つといえる。」（高橋 976）

2016年 田中愛「スポーツ身体論の現象学的考察—アダプテッド・スポーツ実践に生じる『意味』としての身体に注目して—」（『体育・スポーツ学哲学』第38巻第1号、日本体育・スポーツ哲学会）

2017年 和田浩一監修『パラリンピック大事典』（金の星社、2017年3月）

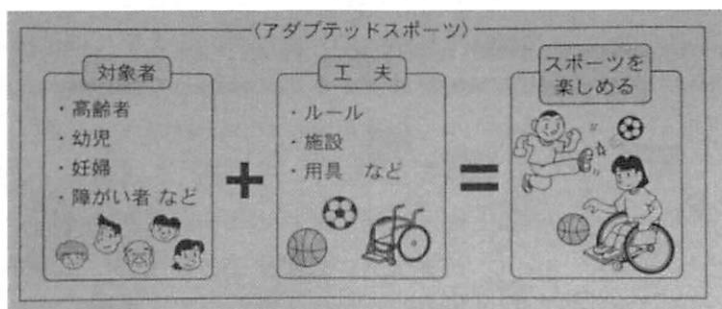
2017年 植木章三代表『イラスト アダプテッド・スポーツ概論』（東京教学社、2017年4月）

植木章三「第1章 アダプテッド・スポーツ総論」の中で、アダプテッド・スポーツの定義について以下のように述べている。

「米国では『アダプテッド・スポーツとは、何らかの工夫

もしくは個人特有のニーズを満たすように設計されたスポーツの実践や成果により構成されているものであり、実践する上で、障がい者と健常者とが交流する統合された環境や障がい者のみで行われる分離された環境の両方で実践されることが想定される」と紹介されている。

わが国では、アダプテッド・スポーツについて、「障害のある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境をインクルージョンしたシステム作りこそが大切であるという考え方に基づく」こと、さらに、「どのような障害があってもわずかな工夫をこらすことによって、誰でもスポーツに参加（Sport for Everyone）できるようになる」こと、「スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適応（adapt）させることによって、障害のある人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても誰でもスポーツに参加できる」と紹介されている。つまり、「アダプテッド・スポーツ」を障がい者や高齢者のスポーツの総称としてとらえ、具体的なスポーツの有り様を含め示されている。（植木 4）



（植木 5）

2017年 コンデックス情報研究所編『パラリンピック大百科』（清水書

院、2017年9月)

2018年 佐藤紀子「わが国における『アダプテッド・スポーツ』の定義と障害者スポーツをめぐる言葉」(『日本大学歯学部紀要』第46号、日本大学歯学部、2018年12月)

『アダプテッド・スポーツ』という言葉は『パラリンピック』に比べ認知度は低いように思われる。永浜(2013)は、『アダプテッド・スポーツ』について、知っている学生は2.7%にとどまることを報告している。著者の経験からも『アダプテッド・スポーツ』を知っている学生にはほとんどいない。(佐藤 2)

2018年 斎藤まゆみ編『教養としてのアダプテッド体育・スポーツ学』(大修館書店、2018年8月)になった

※斎藤まゆみ「第10講 まとめ アダプテッドとなにか?」より

「1. アダプテッド・スポーツ」

日本で「アダプテッド・スポーツ」という言葉が使われるようになったのは2003年頃からである。語源は「アダプテッド・フィジカル・アクティビティ(adapted physical activity)」で、この用語を直訳すると「適応させられた身体活動」となり、こままでには理解が難しい。そこで矢部は、する人に合わせて創造された身体活動、つまりルールや用具、身体活動の方法を個人の状況に応じて作り変えていくことで誰でもスポーツ活動に参加できるという意味に合わせた日本語表記として「アダプテッド・スポーツ」を使うことを提唱した。特に実践者が主体的に取り組む身体活動として、スポーツという言葉を用いたのである。つまり、広義での「アダプテッド・スポーツ(adapted sport、略してAds)」である。『最新ス

ポーツ科学事典』における定義では「身体に障害のある人などの特徴に合わせてルールや用具を改変、あるいは新たに考案して行うスポーツ活動を指す。身体に障害のある人だけではなく、高齢者や妊婦等、健常者と同じルールや用具の下にスポーツを行うことが困難な人々がその対象となる」とある。(斎藤 42)

2019年 新井博編『新版 スポーツの歴史と文化』(道和書院、2019年4月)

※「第9章 現代スポーツの課題」に及川佑介「5 アダプテッド・スポーツとパラリンピック」がある。

※「アダプテッド・スポーツ」とは、障害の程度や発達状況などにルールや用具を適合(adapt)させ、障害者や高齢者、子ども、女性等が参加できるように工夫した運動、あるいは新しく創案された運動やスポーツ、レクリエーションをいう。このアダプテッド・スポーツという概念は、障害のある人がスポーツを楽しむために、本人とその周囲の人々や環境などを取り上げ、それらを統合したシステムづくりが大切であるという考えかたに基づいているといわれている。

アダプテッド・スポーツが身近な存在になってきた背景には、パラリンピックの開催があり、わが国でも1998(平成10)年に冬季パラリンピック・長野大会が開催されたことで、アダプテッド・スポーツをスポーツとして理解する人が多くなった。さらに、長野県では、知的発達障害者のある人の社会参加や自立を目的とした世界大会、スペシャルオリンピックス(冬季)が2005(平成17)年に開催されている。(及川 225-226)

※初版(2012年10月)では「第9章 現代スポーツの

課題」は項目は4までで、新版で「5 アダプテッド・スポーツとパラリンピック」が増補された。

2019年 松村明編『大辞林』（三省堂、2019年9月、第4版）

※アダプテッドスポーツ[adapted sports] [アダプテッドは適応したの意] 道具やルールの一部を、身体障害者が競技できるように適応させたスポーツの総称。車椅子バスケットボールやパラ・アイスホッケーなど。（松村 54）

※定義をさらに正確にするならば、「身体障害者が」⇒「身体障害者や高齢者等が」とすれば網羅できる。アダプテッドスポーツが必ずしも身体障害者に限定されるわけではないため、定義としては不十分であると佐々木は考える。

※『大辞林』（2006年10月、第3版）では掲載なし。また、新村出編『広辞苑』（2018年1月）にも掲載はない。

（5）“challenged”の定着度は？

“challenged”がいつ頃使い始められたかをインターネット上の Online Etymology Dictionary で調べると以下ようになる。

1570s, “having been called to a contest,” past-participle adjective from challenge (v.). As a euphemism for “disabled” 1985. (Online etymology Dictionary)

いわゆる「障害者」の婉曲で使用されたのは1985年がその初出のようだ。インターネット上の“Cambridge Dictionary”では次のような記載がある。

challenged | アメリカ英語辞典

adjective having a physical or mental condition that makes ordinary activities more difficult than they are for other people;
handicapped

(*Cambridge Academic Content Dictionary* からの *challenged* の定義 © Cambridge University Press)

「障害者及び障害者スポーツの表現の変遷年表」からもわかるように、現在では「障害者」を表現する用語としては“the disabled” “disability”などが定着しているのに対して、“the challenged”が会社や団体名で使用されているのは、日本のいくつか理由が推測される。

- 1 これまで使用されてきた“the disabled” “disability”はカタカナ表記すると「ディスエイブルド」「ディスアビリティ」となり、何を言っているのか一般の人には全く伝わらない可能性がある。
- 2 “the challenged”は聞きなれない言葉であっても、カタカナ表記で「チャレンジド」とすると、一般の人はよくわからないが、「チャレンジ」という言葉からの連想や印象で、肯定的に捉えることが予想される。企業名や団体名の場合には印象をよくすることは戦略としては重要である。
- 3 日本ではこれまで「障害(者)」の英語表記“the disabled” “disability”を使用していたが、あまり使われていない表現を求めた。

現在もそうであるが、一般に用語が定着していくには学術用語よりもマスコミの力が大きい。流行語や若者用語を見ればそのことは一目瞭然のことだ。社会背景的には2009年には2つのことに注目しておきたい。6月7日に辻井伸行が日本人として初めて、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝し、その後も活躍し、2019年11月9日の天皇陛下の即位を祝う民間主催の「国民祭典」の祝賀式典では奉祝曲・組曲「Ray

of Water」のピアノを演奏し、その姿は全国に放送された。同年10月10日からはNHKで全盲の中学教師・塙啓一郎（佐々木蔵之介主演）が教師復職による生徒や教師間の複雑な人間模様をドラマ化した『チャレンジド』が放映され、続編も制作された。

ここでもう一つ考えなくてはならないことは、当事者はどう呼ばれることを望むのかということだ。このことは別の問題で筆者が注目した問題である。それは筆者が「アメリカの源流：American Indianはどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ」（佐々木 a 1-26）でも取り上げたが、当事者はネイティブ・アメリカンと呼ばれたいのか、インディアンと呼ばれたいのかと同じだ。1968年設立のアメリカインディアンの権利運動団体「アメリカインディアン運動」（AIM, American Indian Movement）、2004年設立の国立アメリカ・インディアン博物館（National Museum of the American Indian）はなぜ、“American Indian”としているのか。表現には表現する側と表現される側の意識の問題がある。特に、“the challenged”については当事者がどう考えているのかについての客観的な資料を見つけることができなかった。あくまでも団体等がこの名称を使用している。またNHK制作『チャレンジド』のような例もあるが、この表現がこれを契機に一般化しているわけではない。

（6）“adapted sports”の定着度は？

欧米ではすでに“adapted sports”という表現がかなり前から登場しているが、日本では一般的にはまだ知られていない用語である。『広辞苑』などの紙辞書に掲載されていない。

インターネット上で「アダプテッド・スポーツ」の定義をリサーチすると以下ようになる。

アダプテッド - スポーツ【adapted sports】の解説

《adapted は「適合した」の意》心身に障害をもつ人や、高齢者・子供などが参加・競技できるように、ルールや用具などを適合させたスポーツの総称。(goo 辞書)

知恵蔵の解説

障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す言葉。本来は1人1人の発達状況や身体条件に適應させたスポーツという意味。類義語にアダプテッド・フィジカル・アクティビティー(adapted physical activity)がある。日本では2003年頃からアダプテッド・スポーツという言葉が好んで使われるようになった。05年には日本体育学会の専門分科会の1つとして、アダプテッド・スポーツ科学分科会が認められた。(藤田紀昭 日本福祉大学教授/2007年)

なお、日本アダプテッド体育・スポーツ学会 (Japanese Society for Adapted Physical Education and Exercise) のホームページには以下のような解説も掲載されている。

矢部京之助「アダプテッド・スポーツの由来」

1. adapted sport あるいは adapted sports の用語について

馴染みの薄い用語ですが、アメリカ版の著書に記述があります。

・Karen, P. DePauw & Susan, J. Gavron: Disability and Sport, Human Kinetics. Champaign. 1995. の第1章 Introduction to Sport and Individuals With Disabilities の Disability Sport の項 (p.6) に、
～handicapped sports, sport for the disabled, adapted sport, disabled sport, wheelchair sport などとともに記載されています。

・ Ronald, C. Adams, et al. Eds.: Games, Sports and Exercises for the Physically Handicapped. Lea & Febiger. Philadelphia. 1982. の第 8 章は Adapted Sports, Games, and Activities (pp.204-338) です。

2. アダプテッド・スポーツのデビューの背景

1993 年に横浜で開催した 9th International Symposium on Adapted Physical Activity の「Adapted Physical Activity, APA」の日本語訳が発端です。特に「adapt」の翻訳が難題でした。適応、適合などの直訳では APA の理念にそぐわないとしても、組織委員の矢部、草野、中田の知力では適訳を見出せなかったため、身近なテーマの「第 9 回障害者ヘルスフィットネス国際会議」と意識した次第です。《総説 082》

3. アダプテッド・スポーツの提唱

9th ISAPA 開催後も APA の意識が脳裏に焼き付いて離れませんでした。そこで APA の意味を分かりやすく表わす言葉として、adapted はリハビリテーションやレクリエーションなどと同様に発音のまま表記し、physical activity については主体的に取り組む意味合いのスポーツを採用しました。後者の理由は、直訳した身体活動では学術用語風で馴染みにくく、体育にしても先生と生徒といった関係から実践者の受け身のイメージが浮かぶからです。

したがって、アダプテッド・スポーツ (adapted sports, AdS) は、adapted と physical activity を合わせた日本語の造語といえます。具体的には、スポーツのルールや用具を実践者の「障害の種類や程度に合わせたスポーツ」であり、「その人に合ったスポーツ」という意味合いになります。その対象は、障害者や高齢者など身体能力の低いひとたちです。《総説 065, 総説 076, 総説 089》

このアダプテッド・スポーツの概念は、障害などのある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境をインクルージョンしたシステムづくりこそが大切であるという考え方に

基づいています。《資料044》

(草野・中田さんに議論に加わって頂いた。AdS は現 JASAPE の機関誌名の英文表記に採用された)

4. アダプテッド・スポーツ

「アダプテッド・スポーツ」を最初に提言したのは、女子体育(1994)ですが、用語の補足として括弧書きで障害者スポーツ学と記載しています。この雑誌の出版は DePauw(1995)の発刊前ですし、パラリンピックと同様に、和製英語のつもりでした。おそらく Adams(1982)の著書の記憶の一部が残っていたのかもしれませんが。いずれにしてもカタカナの簡略化をねらったものです。

5. 英訳

英訳は *Adapted Sports* とし、スポーツ の複数形を用いています。スポーツ種目と理解してもかまいません。また単数形としたスポーツの総称と捉えても可です。

6. 日本体育学会専門分科会に登録した名称

(社)日本体育学会専門分科会に登録した名称のアダプテッド・スポーツ科学の表記に中黒をつけています。これは、単語の並列を避けるために、外来熟語の単語の区切りとして使っています。訳の分からないカタカナの羅列を避けたいからです。勿論、中黒の有無に関しては、出版社などの規定もあるでしょうから固執しません。

参考文献

- ・総説065：矢部京之助，斎藤典子：アダプテッド・スポーツ（障害者スポーツ学）の提言～水とリズムのアクアミクス紹介～。女子体育。36：20-25, 1994.
- ・資料044：矢部京之助：アダプテッド・スポーツの提言。ノーマライゼーション。12：17-19, 1997.
- ・総説076：矢部京之助：アダプテッド・スポーツと障害をもつ人の体力特性。東海保健体育科学。19：1-11, 1997.

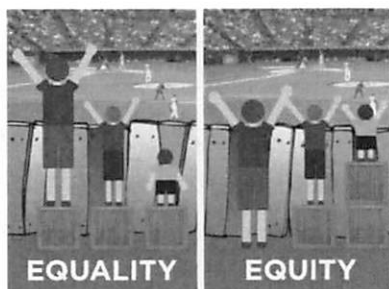
- ・総説082：矢部京之助：長野パラリンピックにおける科学研究と国際会議～アダプテッド・スポーツ科学の芽生え～. バイオメカニクス研究. 2：297-302, 1998.
- ・総説089：矢部京之助：アダプテッド・スポーツとパラリンピック. 学術の動向. 11：54-57, 2006. (矢部 c)

専門的には1970年代には登場したようだが、欧米では1980年代に障害者スポーツの総称として“**adapted physical activity**”が用いられるようになった。この流れの中で1990年代からようやく学術的にも論じられるようになった来た考え方である。2006年の「障害者の権利に関する条約」(国連) (**Convention on the Rights of Persons with Disabilities**)以降は日本でも急速に研究が進んでいることが上記の年表からもわかるだろう。“**adapted physical activity**”は高齢者や障害者を含めて幅広くとらえ、さらに、これに伴い「教育」(education)と「スポーツ」(sports)が含まれることになる。

3 adapted sports は adapted physical activity のひとつ

2020東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、大学の授業等をはじめ、講演等でも取り上げてきたが、COVID-19 (Coronavirus Disease 2019)の影響により、2020年3月24日に史上はじめてオリンピック・パラリンピックの延期が決まった。パンデミックとなり、単にオリンピック・パラリンピックが延期になっただけではなく、世界中の人の生活自体が大きな変化をもたらした。

アダプテッドスポーツは障害者スポーツと高齢者などでも適応できるスポーツの2つの側面を持つ考えてからできている。これには「平等と公正」の違いの考え方に共通するものがある。アダプテッドスポーツを「障害者スポーツ」と単純に同一のものとして捉えただけではその一部



(「平等」と「公正」)

を理解したに過ぎない。車椅子テニスでは返球はツーバウンドまで認められている。ルールをアダプテッドすることもこの考え方に含まれるのである。表現として“handicapped”や“disabled”には否定的な意味合いが含まれている。“challenged”には否定的な意味はないが、「神からチャレンジという使命を与えら

れた人」(NHK制作)という意味やチャレンジ精神など、前向きな意味で使われる。しかし、団体名などでも使用されているが、特に日本ではあまり定着していない。

日本の障害者スポーツの父とも呼ばれる中村裕は、単に障害者のリハビリテーションに留まることなく、これを障害者スポーツにまで高めたのである。日本で学術的にアダプテッドスポーツの考え方をまとめたのは矢部京之助である。障害者を“the challenged”で表現する事例も紹介してきたが、今後はアダプテッドスポーツという表現がさらに定着するのではないかと思われる。これを「適応スポーツ」などと表現してしまうとかなり曖昧な印象となる。

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の準備及び運営において、「ダイバーシティ&インクルージョン」(Diversity&Inclusion)、「ちがいを知り、ちがいを示す」(Know Differences, Show Differences)というヴィジョンがある。しかし、障害者スポーツの表現だけを見ても、決してそこにヴィジョンが生かされているとは思えない。アダプテッドスポーツの表現が日本に適応されるのは果たしていつになるのであろうか。さらに視野を広げれば、adapted sports(adaptive sports)も adapted physical activity のひとつになるのだ。

エピローグ

本稿は障害者や障害者スポーツの英語の変遷や日本での定着度に着目すれば英語語彙論の視点からとらえることもできるだろう。また、障害者スポーツという観点から見れば、福祉分野や体育分野からのアプローチも可能である。一つの教科から捉えることは難しい。まさに「総合的な学習の時間」に相応しい課題である。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
 - (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
 - (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。
- (文部科学省 8)

横断的・総合的な内容を含んでいる課題である。

総合的な学習の時間では、各学校が目標を実現するにふさわしい探究課題を設定することになる。それは、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の将来に関する課題などである。(文部科学省 11)

障害者スポーツ、*adapted sports* の表現の変遷だけを見ても、「総合的な学習の時間」の課題としても十分であるが、これにパラリンピックと

の関係を加えれば、国際理解の要素がさらに加わる深い教材となるのではないだろうか。

印証資料

アダプテッド・スポーツ. 「goo 辞書」

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/アダプテッドスポーツ/>
(access on 20200317)

一般社団法人ザ・チャレンジド. <https://thechallenged.jp/about.html>
(access on 20200320)

植木章三 (2017). 「第1章 アダプテッド・スポーツ総論」、植木章三代表、『イラスト アダプテッド・スポーツ概論』、東京教学社。

臼井永男 (2006). 「アダプテッド・スポーツの概念」、『保健の科学』、特集：アダプテッド・スポーツ—その人に合ったスポーツ、第48巻第8号、杏林書院。

NHK 制作 (2009). 『チャレンジド』。

https://www6.nhk.or.jp/drama/pastprog/detail.html?i=challenged_0ld (access on 20200316)

NPO 法人チャレンジド.

<https://npo-challenged.org/about/index.html> (access on 20200320)

及川佑介 (2019). 「5 アダプテッド・スポーツとパラリンピック」、新井博編、『新版 スポーツの歴史と文化』、道和書院。

葛西嘉資 (1965). 「はじめに」、『国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書』、財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会。

<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/jsad/z16002/z1600201.html> (access on 20200211)

株式会社 KDDI チャレンジド. 「業務内容」

https://www.challenged.kddi.com/jigyo_naiyo/index.html
(access on 20200320)

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 (2015). 『障がい者スポーツの歴史と現状』、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会。

[https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2015_web_150410.pdf#search=%27E9%9A%9C%E3%81%8C%E3%81%84%E8%80%85%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%81%A8%E7%8F%BE%E7%8A%B6%27\(2020年2月8日アクセス\)](https://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2015_web_150410.pdf#search=%27E9%9A%9C%E3%81%8C%E3%81%84%E8%80%85%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%81%A8%E7%8F%BE%E7%8A%B6%27(2020年2月8日アクセス))

近藤照彦 (2014). 「アダプテッド・スポーツの射程」、『体育の科学』、特集：障害者とスポーツ、第 64 巻第 6 号、杏林書院。

斎藤まゆみ (2018). 「第 10 講 まとめ アダプテッドとなにか?」、斎藤まゆみ編『教養としてのアダプテッド体育・スポーツ学』、大修館書店。

桜井伸二(2005). 「障害者スポーツの競技力向上とアダプテッドスポーツ」、『ストレンクス&コンディショニング』第 12 巻第 1 号、日本ストレンクス&コンディショニング協会。

佐々木隆 a (2018). 「アメリカの源流：American Indian はどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ」、『新教育課程研究』、第 5 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 b (2020). 『国際文化交流から文化外交へ 増補版』、武蔵野学院大学佐々木隆研究室。

佐藤紀子 (2018). 「わが国における『アダプテッド・スポーツ』の定義と障害者スポーツをめぐる言葉」、『日本大学歯学部紀要』第 46 号、日本大学歯学部。

鈴木款(2019)「“世界初”のパラリンピックを創ったのは、別府の医師だった」

https://www.fnn.jp/posts/00047438HDK/201907302000_suzukimak

oto_HDK (access on 20200211)

「スペシャルオリンピックス アスリート宣誓」、『スペシャルオリンピックスについて』、公益社団法人 スペシャルオリンピックス日本・長野。
<https://www.son-nagano.com/about/summary.php> (access on 20200424)

高橋まゆみ (2015). 「ノーマライゼーション思想と障がいのある人のスポーツ」、中村敏雄他編『21世紀スポーツ大事典』、大修館書店。

瀧口優 (2013). 「ランドルフ・プルネ、「障害者」、日本特殊教育学会編『障害百科事典』、第V巻(資料編)、丸善出版。

田口貞善編 (2007). 『スポーツの百科事典』、丸善。

田中ナミ a. 「チャレンジドや高齢者が、元気で誇りを持って働ける国に」、第2種社会福祉法人プロップ・ステーション。

https://www.prop.or.jp/namis_room/message.html (access on 20200316)

田中ナミ b. 「『チャレンジド』という言葉について～プロップ・ステーションからの提案」、第2種社会福祉法人プロップ・ステーション。

<https://www.prop.or.jp/about/challenged.html> (access on 20200316)

竹林滋編集代表 (2012). 『研究社新英和大辞典』、研究社、第6版。

竹村健一・竹中ナミ(2000). 「【世界の読み方 竹村健一】(第925回)

IT時代に障害者の在宅勤務と納税を可能にするバリアフリーのための『チャレンジド革命』<社会福祉法人『プロップ・ステーション』竹中ナミ理事長に聞く>、『週刊ポスト』、10月20日号、小学館。

https://www.prop.or.jp/news/clip/2000/20001006_01.html (access on 20200316)

チャレンジド・アソウを利用される方の特徴. 「障害者総合支援法による就労移行支援事業所チャレンジド・アソウ」

<https://challenged.ahc-net.co.jp/guide/feature/> (access on 20200320)

中澤公孝 (2006). 「アダプテッド・スポーツ」、日本体育学会編『最新ス

ポーツ科学事典』、平凡社。

バイヤー、エリッヒ編／朝岡正雄監訳(1993). 『日独英仏対照スポーツ科学辞典』、タイ週刊書店。

「パラリンピックの名称」(1965). 『国際身体障害者スポーツ競技会 東京パラリンピック大会 報告書』、財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会。

<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/jsad/z16002/z1600201.html> (2020年2月11日アクセス)

藤田紀昭 a (2006). 「アダプテッド・スポーツ」、日本体育学会編『最新スポーツ科学事典』、平凡社。

藤田紀昭 b (2007). 「アダプテッド・スポーツ」、「知恵蔵の解説」
<https://kotobank.jp/word/アダプテッド・スポーツ-187680>
(access on 20200317)

藤田紀昭 c (2008). 『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』、角川学芸出版。

「平等」と「公正」(2017) .

https://blog.goo.ne.jp/catalyst_min/e/95608255de386449d9282fa5e5228733 (access on 20200427)

松村明編 (2019). 『大辞林』、三省堂、第4版。

文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編』、文部科学省。

文部省(1981). 「盲学校・聾学校教育の義務化」、『学制百年史』、帝国地方行政学会。

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317778.htm (2020年2月11日アクセス)

矢部京之助 a(2004). 「序章 アダプテッド・スポーツとは何か」、矢部京之助他編、『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』、市村出版。

- 矢部京之助 b(2015).「アダプテッド・スポーツ医科学の応用」、中村敏雄
他編、『21世紀スポーツ大事典』、大修館書店。
- 矢部京之介 c.「アダプテッド・スポーツの由来」、「日本アダプテッド体
育・スポーツ学会」
[https://sites.google.com/a/adapted-sp.net/jasape/yan-jiu-qing-bao/a
daputeddo-supotsuno-you-lai](https://sites.google.com/a/adapted-sp.net/jasape/yan-jiu-qing-bao/a-daputeddo-supotsuno-you-lai) (access on 20200317)
- 矢部京之助・斎藤典子(1994).「アダプテッド・スポーツ（障害者スポー
ツ学）の提言—水とリズムのアクアミクスの紹介—」、『女子体育』第
36巻、日本女子体育連盟。
- 渡正（2001）.『障害者スポーツの臨界点—車椅子バスケットボールの日
常的实践から—』、新評論。
- Bourne, Randolph (2001). “The Handicapped.” Ragged Edge Online.
<https://www.raggededgemagazine.com/com/0501/0501ft2-1.htm>
(access on 20200315)
- Cambridge Dictionary.
<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/challenged>
(access on 20200320)
- Jesperse, Ejgil and McNamee, Mike, editors. *ethics, dis/ability and
sports*. Routledge.
- Karen,P.DePauw & Susan,J.Gavron (1995). *Disability and Sport* .
Human Kinetics.
- Karen,P.DePauw & Susan,J.Gavron (2005). *Disability and Sport* .
Human Kinetics. 2nd edition.
- Online Etymology Dictionary
https://www.etymonline.com/word/challenged#etymonline_v_46640
(access on 20200320)
[https://www.etymonline.com/word/handicap?ref=etymonline_crossr
eference#etymonline_v_41573](https://www.etymonline.com/word/handicap?ref=etymonline_crossreference#etymonline_v_41573) (20200315)

“Sport and Disability thematic profile (print version)” (2009).

International Platform on Sport & Development. <https://www.sportandbdev.org>. (access on 20200420)

Turnbull, Jonna, managing editor (2010). *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford University Press, eighth edition.

Winnick, Joseph P., editor. a (1990). *Adapted Physical Education and Sport*. Human Kinetics Books.

Winnick, Joseph P., editor. b (2011) *Adapted Physical Education and Sport*. Human Kinetics Books. Fifth edition.

Yabe Kyonosuke, Kusano Katsuhiko, Nakata Hide (1994). *Adapted Physical Activity: Health and Fitness*. Springer-Verlag.

【キーワード】 障害者スポーツ、パラリンピック、disabled sports、adapted sports、para sports

【追記】

本稿はもともと2020年8月19日実施を予定していた教員免許更新講習用の教材をもとに執筆したものである。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、講習自体も実施されるのか中止となるのか微妙な段階である。そのため、講習の有無にかかわらずその教材の内容を生かしてまとめたものである。

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第19号
2020年8月30日 発行
武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328
埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号
武蔵野教育研究会事務局
武蔵野学院大学 佐々木隆研究室

Studies on New Curriculum

Number 19

30 August, 2020

The Society of Musashino Education Studies